

書物の郷・只見（最終回）

只見の古籍コレクション



▲借りて読まれた石伏の『平家物語』江戸初期版本

明治以前に書写または木版刷りされた古い書物のことを古籍とよんでいます。天皇家・公家・大名・寺社では、貴重な書物を集めて、文庫（古籍コレクション）を作っていました。そのため古籍は大都市に集中しています。したがって、古籍を調べる時には、それらを収めている図書館や文庫（古籍コレクション）に行き、収蔵庫から出してもらい閲覧することになります。また、都市ではなく村落にも、屋敷内に文庫蔵や書院の間を持つ有力者や知識人がいました。しかし、只見町では、文庫蔵を持つような家ではなくても、村落の家々に古い書物が残されています。平成二十六年から只見町教育委員会では神社仏閣等調査事業を行っています。その調査からたくさんの古籍が見いだされています。

旧修験寺院では、檜戸・山崎行弘家の龍蔵院に約二八〇点、只見・五十嵐義博家の吉祥院に約一五〇点、塩ノ岐・清水タカノ家の和光院に約三〇点の書物があることがわかりました。医家であった黒谷・原田拓夫家には約一〇〇点の書物がありました。只見ダムの建設によって水没して移転した石伏集落にも、約六〇点の書物が残されていました。そのほか、只見・藤田佐武郎家に約三〇点、蒲生・馬場信雄家に約二五点、坂田・飯塚吉次家に一点、只見・五十嵐忠弘家に八点、国重要有形民俗文化財に指定されている「会津只見の生活用具と仕事着コレクション」に八点の古い書物や巻物が残されています。

梁取・成法寺の本堂には、大正十三年『武田祖梁師寄附物品明細書物之部』が掲示されています。寄贈書約一五〇点のうち、今回の調査で約四〇点が現存することがわかりました。明治・大正期の住職だった武田師が書物を残そうとした意思がうかがえます。

家ごとの書物の所蔵数は少ないとしても、只見町全域で見れば合計約七〇〇点にもなります。只見町全体が一つの「古籍コレクション」であり、只見町は「書物の郷」であったといえます。みなさんの家で、古い書物がありましたら、ぜひ町教育委員会へお知らせください。

持続する書物文化

只見町では、古い書物が生活の中で利用され続け、その結果として書物が残されました。石伏集落に残る『平家物語』（もと二二巻、現存一〇巻）は、正保三（一六四六）年に出版された版本です。『平家物語』は中世には写本で伝えられ、江戸時代初期には古活字版・片仮名整版本・平仮名整版本が出版されました。石伏の『平家物語』は、寛永版本に次ぐ初期の平仮名整版本です。『平家物語』の流布本が、江戸初期に山間地に流布していたのです。その書き込み



▲武田祖梁師が寄贈した成法寺の書物

には「右此本、何方へ参候共、御読之後は、持主方へ御返可被下候、石伏村 彦次右衛門」とあります。「お読みの後は」とあるように、どうぞ読んで返して下さいというので、現存する『平家物語』は、くたくたにやつれています。貸し借りして長い間読み継いできたためです。それは、持続した書物文化があった証です。

自然と文化が共生する 持続可能な社会

只見町は、多雪が育んだ自然と人々の生活・文化が共生していることが認められて、只見ユネスコエコパークに登録されました。このことは、只見町の書物文化についても同じことがいえます。古い書物を捨てずに残してきたのは、書物の背景にある伝統的文化を保持し、持続して活用してきたからです。文化は古いものも含めて多様な存在であり、簡単に投げ捨てるようなことがあってはなりません。古い書物をじっくり調べていく中で、過去から未来へのメッセージが見いだされたいと思われ